０２．９．１８付

# 「天成る道に　民おたす」についての一考察　「第４号原稿」

吉田　六雄

## はじめに

ホツマツタヱには、「アメナルミチニ　タミオタス」の言葉がある。この言葉について、江戸時代にホツマを研究者された「和仁估安聰」は、ホツマツタヱ「安聰」本において「タミオタス」を漢文にて「治ι民」→「民を治める」と訳している。その後のホツマ研究者も同じ様に訳している。だが、ホツマを読み続けると「天成る道に　民お治す」の訳は、当てはまらないのではとの疑問を持つ。

## 疑問

「和仁估安聰」本は、「民お治める」と訳している。だが「民おたす」を治めると訳していいのだろうか。「天成る道に民を治める」となると果たして大御神は、民を統治する等に等しい言葉の意味を持つ「治め」の言葉が、「タス」であるのだろうか。またこのことは、「天成る道」に反しないかとの疑問も沸く。また現在でも大御神が至る所でお祀りしてある故は、「治めた」からなのであろうか。本当はもっと、「民のためにして上げた」ことから敬われ、現在まで引き続き祀られる様になったのではなかろうか。このことからもう少し、「タス」のことを奥深く研究する必要がでてきた。

## ホツマツタヱ原文訳の「民おたす」事例文

２９－７文

百億四穂　過ぎて天日の
大御神　天成る道に
民おたす　皇子のオシヒト
譲り浮く　御孫キヨヒト

## 辞書をひく

この「タス」の調べ始めは、辞書を引くことから始まる。現国語辞書では、「たす・・・足す。足し算の＋」を記載している。半信半疑で古語辞典を見ると、期待に反し「たす」の単語の記載がない。まさかと思いつつ更に万葉集辞典にて調べ直すと、やはり「たす」の単語が見つからない。ホツマツタヱを勉強していくと、辞書にない言葉にぶつかることが多々ある。ホツマ研究者は慣れっこのため諦めず、ホツマツタヱ文献を丹念に読んでいく。「タス」も辞書にない言葉として、同じ様に調べることになる。

## ホツマツタヱ原文より「タス」を見つける

「タス」の言葉が含まれる文節をホツマツタヱ原文より拾い出してみた。

全文で３９ヵ所に「タス」の文章が記載されていた。層別すると「〇〇〇タス」、「〇〇〇〇〇タス」、「〇〇〇タス〇〇」や「タス〇〇〇」等の表現になっている。

〇〇〇タス
　まず五音節の後二音の「〇〇〇タス」であるが、「タミオタス」「ツクシタス」「クニオタス」「ワラニタス」「コレオタス」「ムネオタス」「カニオタス」「トモニタス」「アワオタス」「アツサタス」など１０個がある。
　だが、「ツクシタス」などは、「筑紫治す」「筑紫を治める」で、不思議に安聰の意見でもいいかと思える。だが「ムネオタス」は「胸お治す」「胸お治める」。「コレオタス」は「これお治す」「これお治める」では、ニアンスが違ってくる。

〇〇〇〇〇タス
　七音節の後二音の「〇〇〇〇〇タス」はどうだろうか。
「ヤソキネニタス」「トノミヤニタス」「モチテタミタス」「ミオヤツゲタス」「タハタミオタス」「コシクニオタス」など６個がある。ここの「タス」は「天成る道に」合っているか疑いが生じる。

〇〇〇タス〇〇やタス〇〇〇
　もう二つの「タス」はどうだろうか。それは「〇〇〇タス〇〇」と「タス〇〇〇」である。ホツマツタヱ原文には、
「タスケシム」「キミノタスケト」「トミガタスケテ」「タスケオキ」
「ワレヲタスケテ」「ウヱタスカタモ」「イエハタスケテ」「ワレオタスケヨ」「ミナタストキ」「ウツホハタスク」「タリタスクノリ」「タスクルタミハ」「タスカガミ」「ナンチタスケヨ」「タスユヱニ」「タネコガタスケ」
「トモニタスケヨ」「タミタスヲシエ」「タスケシニ」などの１９個がある。

　これを要約すると「〇〇〇タスケ〇」が６個、「タスケ〇〇」は３個、「〇〇〇〇タスケ」が２個、「〇〇〇〇タスク」「〇〇タスク〇〇」「タスク〇〇〇〇」の「タスク」が各１個。それに「タス〇〇〇」が２個、「〇〇タス〇〇〇」の３個ある。更によく見ると「タスケ」「タスク」る等の「助け」「助く」が合わせて１１個ある。

　現在でも「タスケ」「タスク」は使用されていることから意味は分かりやすいが、万葉集辞典の「たすく」の記載を紹介する。意味は「助ける。力を添える。補佐する。」になっている。また疑問の「タス」が５個もある。

オサメ
　「和仁估安聰」本は、タスを「治す」と訳して「治める」の意味にしている。すると訳の「オサメ」の言葉は、ホツマツタヱ原文にないのだろうかと疑問がでる。

　だが調べて見ると、「アメニオサメテ」や「ムソヨロオサメ」そして「メクリオサメテ」の言葉が３ヵ所もある。「タス」の時と同じ様に、「おさめ」を辞書で調べると現在国語辞書では、「おさめる・・・①支配する。政治をとる②たいらにする。おちつかせる。しずめる。③処理する。」になっている。

　また古語辞典を見ると「をさむ」がある。意味は①安定した状態にする。整える。特に世の中を統治する。平定する。②落ち着かせる。一方、万葉集辞典には「おさふ」の単語になっている。意味は、①おさへる。②おしつける。③制する。④おしとどめる。

　所謂辞書の「おさめ」は、「上から見て下を制御する状態をおさめ」と使用していると考える。天成る道とは、「上から下を見下ろしたのであろうか」と疑いを持つ。

アメナルミチニ　タミオタス
　今まで調べてきた「タス」について「オサメ」が正しい訳の表現になるのか、また「タスケ」や「タスク」の「ケ」「ク」が五音節や七音節にするために省略され、正しくは「タスケル」や「タスクル」の表現であろうか。

　仮に「ケ」や「ク」が省略してあると考えると、「アメナルミチニ　タミオタス」の訳文は、「天成る道に　民お治く」でなく「天成る道に　民お助く」に表現される。もう少し平たく表現すると「天成る道に　民を助ける」「天成る道に　民を助くる」になる。

　この「タス」が「治める」であったか、「助け」「助く」であったかを判断する分岐点は、「天成る道に」をホツマツタヱ原文より勉強する以外にない様だ。

アマナルミチ
　松本善之介先生は、東京・赤坂のホツマ勉強会「例会」を主催されていた。毎回例会の始めと終わりにみんなで言葉を読み上げていた。その「集いの終わるときのノリトコト」に「今ここに　アメナル道お　友だちと　共に学び　・・・・」とアメナル道を教えていた。その松本善之介先生は、先生自身が発行された「月刊ほつま」１１２号（昭和５８年５月号）で古代日本の民主主義として紹介されている一節がある。

　先生は、この一節を「一言でいへば、上が下を恵む御志が、いかに深いかといふことである。・・・民を大事にすることは、わが国古来から動かし難いものと・・・・伝えられてきた。」

２７－３１～２７－３８
キアト夏　　　御位なりて
伊勢に告ぐ　　アマテル神の
勅り　　　　　戸隠おして
我が皇孫　　　多賀の古宮
造り替える　　都遷せば
天に継ぎて　　地の二神ぞ
我昔　　　　　天の道得る
香具のフミ　　御祖百編お
授づく名も　　御祖天君
この心　　　　万の政お
聞く時は　　　神も降りて
敬えば　　　　神の御祖ぞ
この道に　　　国治むれば
百司　　　　　その道慕ふ
子の如く　　　これも御祖ぞ
この子ズエ　　民お恵みて
我が子ぞと　　撫づれはかえる
人草の　　　　御祖の心
すへ入れて　　百のヲシテの
中にあり　　　綾繁れば
味見え　　　　錦の綾お
織る如く　　　よこべつうぢに
経てお分け　　闇路の所は
灯りなす　　　春日子守と
味知らは　　　天つ日嗣の
栄えんは　　　天地くれと
きわめなきかな

アメナルミチニ　タミオタス
　私は、この一節を「天成る道」の原点と考えたい。
「天成る道」は、「御祖天君　この心　万の政お　聞く時は　神も降りて　敬えば　神の御祖ぞ　この道に　国治むれば」と、政ごとの原理原則が説かれている。

古代日本にも、「民のために天君が何ができるか、民の声を聞いて政ことを行われた」ことが、ホツマツタヱ原文より読みとれる。
　このことから「タス」は、「天成る道に民を治める」より「天君が民を助ける」や「天君が民を助すくる」の訳の方が、「天成る道」を言い当てているものと考える。

以上